

平成二十三年三月十一日、午後二時四十六分岩手、宮城、福島の三県を中心にM・9・0の巨大地震が発生した。その後、これを「東日本大震災」と呼ぶようになった。被害は広域で、青森、茨城、千葉県にまで及んでいたことが明らかになったからである。

この地震はある程度気象庁の地震観測所が予測し、近い将来に三陸沖で大きな地震が発生すると予告していた。私は地震学については全くの素人であるが、時おり釣りに出向いていた女川町の民宿で、二度ほど大きな地震に見舞われる経験をしていた。さらに女川湾の大小の岩はすべて沖に向かって傾斜しているのだった。これは陸地が東の海底に引き込まれていることを意味している。それでも私が海釣りを続けていたのは、漁師を生業なりわいとしていた民宿の主人が云う「地震や津波は陸おかにいるより船に乗っていた方が安全だ」という言葉言葉を信じていたからであつた。

しかし、今度のM・9・0は誰もが予想もしていなかった千年に一度といわれる超巨大地震だったのである。そして、それが惹起した巨大津波は二万人に近い老若の命を奪い、海辺の人々の全財産をあっという間に奪い去った。

だが、悲劇はこの一幕では終わらなかった。津波の魔の手は東京電力福島第一原子力発電所をも襲い、原子炉にメルトダウンを起こさせた。大爆発を誘発させた放射能は、直後に風向きが変わり普段の海側ではなく山間^{やまあい}を内陸に向かわせたのである。専門家はこれを「魔の風向」と呼んでいる。放射能は福島県の人口密集地を通過し、県内の三分の二を汚染した。しかし、この事実を政治家や専門家は口裏を合わせたように、人体に影響のない線量であると繰り返しすばかりであった。政府は対応策を何度も検討したが、その会議の記録さえ取っていなかったことが判明した。そればかりか、事故の翌日には米国の空母が太平洋上で通常の三百倍の線量を観測し、事態のただならぬ事を察知していた。米国も露国も緊急援助隊を送ることを申し出たが、わが国の政府はこれを断った。援助を受け入れたのは自分たちでは解決できないことを覚った半月後であった。この根拠の無い政府の発表と原子炉の内部を見て来たかのような原子力安全・保安委員会の見解を、福島県民ならずとも一部の学者を除き、国民は信じるしかなかった。その結果、警戒地区の人々の避難は二ヶ月も遅れ危険を倍加させた。大地震と大津波の爪跡は海辺の風景を一変させたが、原発事故の始末は、その要因を作った事故対

策本部長内閣総理大臣が東京電力と協力し、早急に復興させなければならぬ重い責任がある。しかし、この存在感の薄い総理は打開策を講ずることもなく辞職した。東電の対応も歯切れが悪く、心の奥にはこの事故は自然災害が齎もたらしたものであるという意識が見え隠れしている。事故とは本来、人為的ミスを云うものであつて自然災害とは別のものである。精密機械の塊のような航空機の事故の大半は人為的なミスであるとも云われている。

深刻なのは放出された放射能である。大地に降り注いだ線量の多きは、米、野菜は勿論、家畜の餌、それが生み出す乳牛や食肉、キノコや山菜、果物、森の木々、建築用の碎石にまで及ぶ。子供たちは校庭を駆け回ることも出来ず鬱うつ気味になる児童生徒も少なくない。政府は除線や表土の剥ぎ取りを奨励しているが、福島県を何度も訪れている放射線に詳しい東京大学の児玉龍彦教授は、福島県の線量が通常に戻るには、チェノブエリの事故例からみて四十年は掛かると試算している。もう一つの問題は海水の汚染である。福島県の漁船はこの事故以来一艘も出漁していない。翌年の二十四年六月試験操業開始）獲れた魚介類の線量が、未だに出荷出来ない値を示しているからである。さらに、風評の被害は国内のみならず輸出品にま

で及び、我々の予想をはるかに超えるものがあつた。外国人から見れば福島原発の事故は日本国全体の事故の印象になつてしまふのである。毒入り餃子が中国製だつた時のことを思い返してみれば解りやすい。「中国食品は総てキケン」という烙印を押されてしまふのである。

ここに来て犯人探しや事の善悪を論じてても問題は解決しないが、ここまで事を深刻にしたのは決して天の悪戯いたずらばかりではない。原発事故発生後の事後処理の不味さまずにあつたことは、今や小学生でも知つている。わが国の政治レベルの低さもさることながら、これだけの大事故を隠蔽いんぺいとまでは言わなくても、事故を最大公約数に抑えて発表し、返つて問題を深刻にしまった為政者たちには深く謝罪してもらい、もう一度「論語」を読み直して欲しいと思う。わが国の政治家のほとんどは文科型の出身である。原子炉の仕組みを詳しく知らないのは当然と言えるかも知れない。それにしても、原発が国の管理下に在る以上、万が一の事故を想定して対応策を講じて置かなかつた不備は厳しく指摘されなければならないだろう。しかも、あの場面で顔色も変えずに理路整然と、知らないことを見てきたかのように話せる官房長官の神経は、厚顔無恥のレッテルを貼られて

も仕方がない。その人が内閣改造後も経産大臣の椅子に座わり、当時の発言を忘れたかのように答弁している様子は滑稽でさえある。

福島原発事故については、もう一つ、被災者にも不利な証言をしなければならぬ。事故の数ヶ月前、福島県知事はプルサーマル燃料の再利用計画を東京電力に許可していたのである。加えて、東電は原発近隣の市町村に公共施設やサッカー場まで寄付し、固定資産税は無税としていた。これは原発事故の恐ろしさをお金で肩代わりさせるようなもので、これという産業のない田舎町にとっては魅力でもあった。しかし、ここに来て事故が発生すると、知事をはじめ住人たちは口を揃えて国と東電を非難し始めた。でも、その矛先はすでに述べた理由で皮肉にも鈍くならざるを得なかったのである。そして、東京電力から安全神話の包装紙で包まれたアメという公共施設の多くは、放射線を含んで無残な瓦礫として残ったのである。私は震災と津波の跡の異様な風景を見渡し、「この瓦礫、なからましかば・・・」と思ったが、この瓦礫の大小はすべてつい先ごろまで、この地で暮らしていた人々の生活に欠かせなかった生活用品であり形見なのだと気づいた時、他県の人々には汚物でしかない瓦礫に、言葉では表現しきれない寂寥を覚えた。